

座長コラム「長岡の風」

第24回 2026年5月

「モンゴルに行ってきた」

長岡経済・産業連携会議（座長：高野裕）

ダウンのコート

この連休を利用してモンゴルに行ってきた。事前の情報では朝晩は寒いからダウンのコートが必要だという。そこで、大きなカバンにフカフカのダウンコートを詰め込んで出かけた。ところが、現地についてみたら、今日は暑かったですね、などと言われジャケットも脱いで、冬用の下着を着ていることを後悔する始末。世界中どこでも異常気象なのかと感じた。とはいえ、やはり日が暮れると気温は一気に下がり、朝晩は3度、昼は20度などという。

働き口

ところで、モンゴルに行って感じたことを少しお話ししてみたい。モンゴルの首都ウランバートルはそもそも人口規模60万人を想定して計画された街だという。国土は日本の4倍という広大な面積を持つが、遊牧民が家畜を移動させながら育てて生計を立ててきた民族で、街に定住する民族ではなかった。だから、街には工場などはほとんどなく、ヤギの毛で作るカシミア製のコートやショールなどを作る軽工業などが少しある程度。あとは、石炭や鉱石などの鉱山がある程度で、定住して工場で働くようなニーズも少なく街に行っても働き口というより清掃員などの低賃金な働き口程度ということになる。

国民の半数

そんな社会構造のモンゴルで、あるとき冬の寒さが非常に厳しくなってしまう、遊牧民の家畜が全て死滅してしまった年があったという。そのため遊牧民は生活の糧を失って、仕事を求めて都会に集まってきた。お金もないから街の郊外に自分たちが使っていたゲル（テント）を空き地に立てて生活する。そのゲルは一応電気は引っ張ってあるが上下水道が無い。井戸水のあるところまで毎水を汲みにゆく。そんな生活を送っているという。気づいてみたら、ウランバートルに集まった人口は160万人、およそ国民の半数が集まってしまったことになる。そうなると、都市のインフラも想定外の人口に耐えきれず、道路は年中渋滞で数キロの距離移動に30分、1時間と時間がかかってしまう。

日本と韓国

このモンゴルの首都であるウランバートルの中心部は近代的な都市という印象だ。そんなモンゴルに生活をしている上流階級の家族に話を聞いた。彼らは毎年人間ドッグを受けに海外に行くという。どこに行くのかと聞くと日本ではなく、韓国に行くという。なぜならば、日本に行っても通訳がない。それに比べて、韓国の病院は通訳がきちんとついてくれて便利だという。そして、何より、食べ物が美味しいので日本にゆくより韓国に行く方が良いという。

海外での評価

さらに子供たちの留学先で人気なのは日本より韓国だという。確かにモンゴル空港の免税ショップを見ると、日本語は見ないがハングル語は目にする。モンゴルに行って、今の海外での日本と韓国の立ち位置を思い知らされたような気がした。